人生妙なり

ツール・ド・のとでの出会い

一青 妙

おもてなし力は日本一

能登半島を、私は台湾製の愛車「GIANT」のロードバイクで、駆け抜けた。総距離400キロ。消費カロリーは7千キロカロリーを超え、体重は3キロ落ちて、ゴール後の写真をみた知人から「頬がこけてるよ」と言われた。それでも、気分は爽快だ。体中の毒素が抜け落ちたように感じる。そして何よりも巨大な達成感。

9月17日から19日まで開催された「ツール・ド・のと」(北國新聞社主催)。愛車を輪行袋に入れて肩に担ぎ、新幹線で金沢に入った。コロナ禍による中断で3年ぶりの開催。私にとっては2017年の参加以来、2度目の挑戦となる。

途中、台風接近によるフェーン現象の猛暑に苦しめられた。それでも、絶景の千里浜なぎさドライブウェイを走り、収穫期を迎えた千枚田の美しさを堪能した。

話し上手のおかみさん

二日目に「ツインブリッジのと」と「能登島大橋」を渡り、到着した和倉温泉で嬉しい出会いがあった。滞在先からほど近い「辰巳鮨」のカウンターに座り、地元の新鮮な魚を堪能していたときのことだった。話し上手のおかみさんが、和倉からは目と鼻の先にある中能登町のことをしゃべり始めた。

「私は中能登出身なの」

私の母も中能登にルーツがある一青姓だ。

「中能登には一青という地区があって、一青妙さんという観光大使がいて、北國新聞でエッセイも書いているのよ」

「私が……本人です」

沈黙が数秒続き、ほかの常連さんから「え～、本当？」「ウソ、やだ」という声があがった。おかみさんは呆然として言葉を失っていた。

このエッセイをいつも楽しみに読んでもらっていたという。とても嬉しかった。ちなみに、辰巳鮨の大将は宮下為幸・中能登町長と趣味のゴルフを通して親交があり、宮下町長はこの店にもよく来ているという。世間は狭いものだ。

その翌日、中能登町の道の駅「織姫の里」が昼食会場だった。宮下町長ら町の皆さんがわざわざ私の到着を待ってくれていて、一緒に激うまの能登豚メンチカツカレーを味わった。故郷の道を大勢のサイクリストが駆け抜ける様子に心から感動した。

能登半島一周はなかなか大変なコースだ。3日連続で100キロ以上を走り、急峻な峠越えも多い。何度も心が折れそうになった。その度に、励まされたのが、路肩に立って声援を送ってくれる地元住民の方々だ。そして、地元サイクリスト・行政・警察・自衛隊まで一体になった周到な大会運営。名産を織り込んだエイドでの食事。

私は全国各地の自転車イベントに参加しているが、ツール・ド・のとのホスピタリティ、おもてなし力は、間違いなくナンバーワンである。

県の無形文化財レベル

すでに開催は34回目を迎え、イベントはすっかり地域社会に根付いている。大会をここまで育てあげた北國新聞社にはサイクリストとして敬意を払いたい。ツール・ド・のとは1906年に同社が主催した県内初の自転車ロードレースを源流とするらしいが、その価値は県の無形文化財といってもいいレベルである。

もちろん時代の変化とともに改善してほしい点もいくつか感じた。例えばコース設定がもう少し参加者に優しくなってもいいかなと思う。秋の能登半島をまるごと満喫し、「能登はやさしや土までも」を世界に広げるイベントとして、私も日本、そして台湾、世界に向けて、大会の魅力を発信していきたい。

上2度目の挑戦となった私(右)。多くのサイクリストとの交流も楽しかった
下千里浜を疾走する一青さん
(いずれも一青さん提供)

◇次回は11月２日に掲載します。

ひとと・たえ　台湾人の父と中能登町をルーツに持つ母との間に生まれる。家族や台湾をテーマにエッセーを執筆。台南市親善大使と中能登町観光大使を務める。著書『私の箱子』『ママ、ごはんまだ？』を原作に映画化。最新作は『「環島」ぐるっと台湾一周の旅』(東洋経済新報社)。